上小田中遺跡

発掘調査報告書

－1998.3－

中野市教育委員会

上小田中遺跡

発掘調査報告書

－1998.3－

中野市教育委員会

刊行にあたって

上小田中遺跡は古くから古墳時代の遺跡として知られていました。古くは昭和46年にも発掘調査が中野市教育委員会により行われています。

この度、小田中集落センター敷地内に防火貯水槽の設置が計画され、中野市教育委員会では事前調査を実施し、記録保存を図ることになりました。

調査の結果から、郷土の歴史に新たな知見を加えることができたものと考えます。本報告書が多くの方々に活用され、市民の皆様の研究や学習の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただいた地元の皆様をはじめ関係各位にあつく御礼を申し上げます。

平成10年3月

中野市教育委員会教育長　小林　治己

例　言

本報告書は、小田中集落センター敷地内に防火貯水槽の設置工事に先立ち中野市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

発掘調査及び本報告書の執筆は中野市教育委員会学芸員中島庄一と調査員関武が行った。

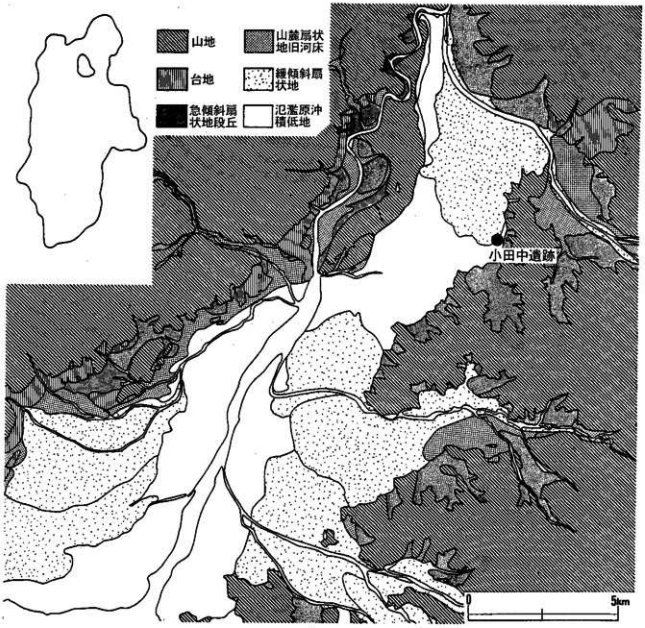
1　遺跡の位置と地形

上小田中遺跡は長野県中野市大字上小田中地籍に位置する。中野市は中部高地最大の長野盆地の最北端、紡錘形の盆地が収束しようとする直前に位置する。

長野盆地の低地には東西を画する山地から流れ込む河川によって、いくつかの典型的な扇状地地形が発達する。

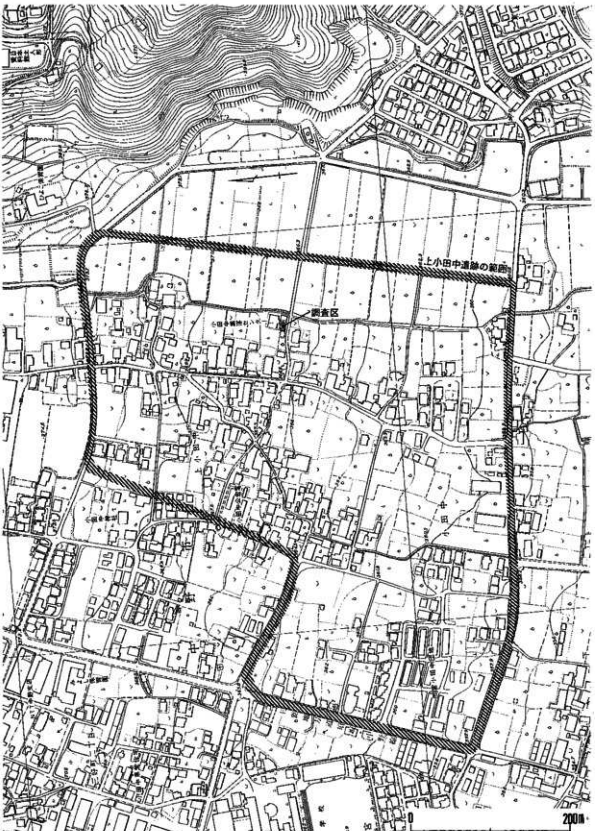
中野市もそうした扇状地の一つである中野扇状地に立地している。中野市の地形は大きく東を画する山地、西を画する丘陵、市街地をのせる扇状地、扇状地の南に広がる低地からなる。いうまでもなく、市域の大半を占めるのは扇状地である。

上小田中遺跡は扇状地の南東側先端、扇状地とその東を画する山地の境に位置し、南北530m、東西700mの範囲にある。



第1図　遺跡の位置(1)

第2図　遺跡の位置(2)



第3図　遺跡の広がり

2 遺　構

(1)古墳時代の遺構

土器集中地点(第4図)

位　置

調査区南南西側のほぼ中央、調査区外との境付近に位置する。

検出面

第Ⅱ層下面。

検出状況

高坏2点、壺1点が同レベルの位置にあった。高坏2点は横だおしの状態で、壺は上面を向いた状態で検出された。

土器集中地点の南南西に焼土が見られた。レベルは検出した土器とほぼ同レベルだった。周辺から同時期のものと見られる土器片が検出されたが数は多くない。

地山にわずかに落ち込みのようなものが見られたがプランを確認することはできなかった。結果的にどのような性格のものか断定するまでに至らなかった。

(2)平安時代の遺構

第1号竪穴住居(第6図)

位　置

調査区北西側寄りに位置する。遺構の半分以上が調査区外に存在している。

検出面

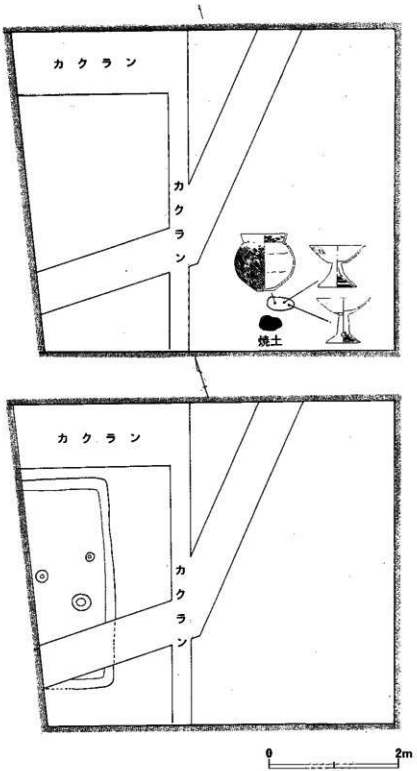
第Ⅱ層上面

土　層(第5図)

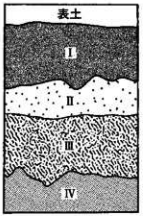
①層は整地の際に盛られた客土。

②層は耕作土直下の堆積層で上面は整地による削平を受けて残存していない。

③層下層は④層を切って落ち込んでいる。第1号



第4図　調査区



第５図　基本土層図

竪穴住居とは別の遺構の存在が考えられるが、検出することはできなかった。

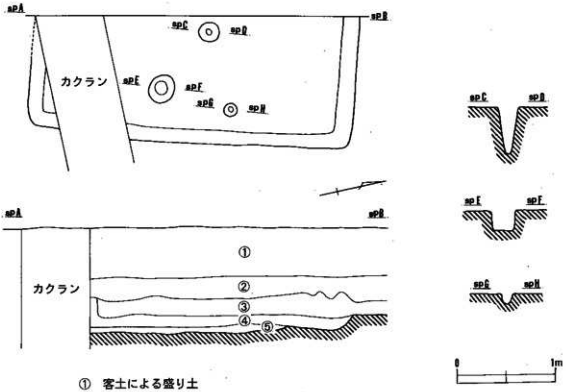
④層は第１号竪穴住居の覆土と見られる。

⑤層は堅くしまっている土層で、第１号竪穴住居の床と見られる。

規模と形状

平面形態は検出された部分の形状から、隅丸正方形を呈していると思われる。

大きさは144×326cmを測る。住居の深さは検出面より床面まで10cm、底面までは19cmを測る。



① 客土による盛り土
② 白黄色褐色土・粒子が細く粘質性、砂質性がある。
③ 暗黄褐色土・粒子細くしまりがある。砂質性がある。炭化物の粒、土器片わずかに含む。
④ 暗黄褐色土・粒子細く砂質性がある。炭化物、土器片多く含む。(完形品も含まれる。)
⑤ 黄褐色砂質土・粒子細くしまりのある砂質土

第６図　遺構図

床　面

床面には堅くしまった黄色土が見られた。範囲は北北東側壁面から南南西側へ約40cmの所からほぼ一面に広がる。厚さ8cmを測るこの黄色砂質土層上面が床面と思われる。

床面は南南西側の一部が下水道工事による破壊を受けている。床はⅡ層まで掘り込んでいる。

壁

わずかに立ち上がり部分が認められるのみである。

柱

住居内より3か所ピットが検出された。いずれも底面での検出であった。ピット内の堆積層は③、④層の暗黄褐色土であることで地山とは明確に見分けることができたが、第1号竪穴住居に属するものか限定するまでには至らなかった。

カマド

調査区外に存在するものと思われる。

遺物出土状況

検出された住居のほぼ中央の調査区外との境付近より坏2点を検出している。その他はすべて小片のみであった。検出された遺物のほとんどを坏類が占めていた。

3　遺　物

(1)縄文時代の遺物(第7図、8、9)

今回の調査でⅢ層内より縄文土器片、打製石斧を各1点ずつ検出した。

(2)古墳時代の遺物(第7図、1～4)

甕1点、高坏2点、坏1点を検出した。

1は口縁部が「く」字状に強く外反する中型の甕である。球形の体部に平底がつき、体部はハケ調整が口縁部はヨコナデ調整が施される。

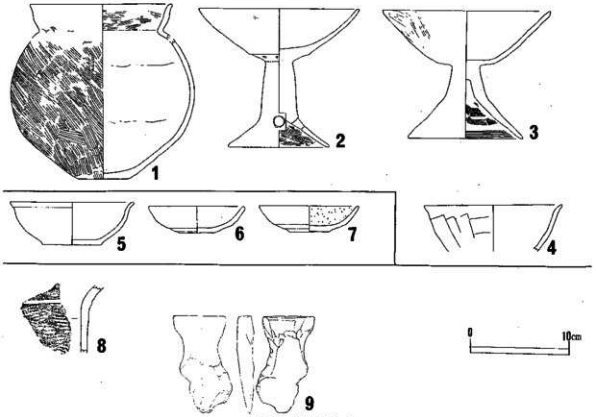
2は口縁部がやや内湾する坏部に、柱状に発達した中実の筒部に大きく開く裾部を取り付けた形態を呈する脚部が付いたものである。坏部の器壁は薄手で、坏底に稜を有し、内面底部はほぼ平坦である。脚部は裾部に4孔の透しを有する。坏内面及び脚部は磨き調整が、坏口縁部及び脚端部はヨコナデ調整が施される。

3は直線的に開く口縁部を有する坏部に、坏部との接合部から「ハ」の字状に大きく開く形態を呈する中空の脚部が付いたものである。坏部の器壁は薄手で、坏底に明瞭な稜は見られず、内面底部はほぼ平坦である。坏内面及び脚部は磨き調整が、坏口縁部及び脚端部はヨコナデ調整が施され、坏内面に僅かにハケ跡がみられる。

4は口縁端部が僅かに外反する形態の坏である。底部欠損のため全体の器形は不明である。体部はヘラ削りが、口縁部はヨコナデ調整が施される。

(3)平安時代の遺物(第7図、5～7)

坏3点を検出した。いずれも底部に回転糸切り跡を残す坏である。器体全体にヨコナデ調整が施されるが、7は内面黒色処理される。



第７図　遺物定測図

遺　物　観　察　表

図版番号	機種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調　整　方　法	備　　考
第7図－1	甕	14.3	5.0	11.6	ハケメ	
第7図－2	高坏	16.2	10.1	14.1	磨き	4孔の透し
第7図－3	高坏	16.8	11.6	13.0	磨き	
第7図－4	坏	14.0			へラ削り	底部欠損
第7図－5	坏	12.6	5.8	4.3	底部回転糸切り	
第7図－6	坏	9.8	2.7	3.6	底部回転糸切り	
第7図－7	坏	10.2	2.7	4.2	底部回転糸切り	内面黒色処理

上小田中遺跡発掘調査報告書

印　　刷　平成10年３月20日
発 行 日　平成10年３月20日
編集・発行　中野市教育委員会
　　長野県中野市三好町１－３－19
印 刷 所　㈲高錦堂印刷